特集

ふくしまのくだものは夏だけじゃない

お待たせしました。福島市の秋冬は、リンゴのシーズン。郊外の果樹園でも真っ赤に色付いたリンゴの収穫が始まりましたよ。今号の特集では、福島市でのリンゴ栽培のルーツをたどりながら、福島のリンゴの魅力と今年から販売が始まる新品種、さらには1年中福島のリンゴを楽しめる6次化商品をご紹介します。

阿部さんが管理するリンゴ畑。自分の花粉では実を結ばないリンゴのために、人工授粉やミツバチの導入はもちろんのこと受粉樹も数多く植え受粉率を上げている

福島りんご研究会会長
阿部（あべ） 幸弘（ゆきひろ） さん

1954年生まれ。果樹園やまとの創設者であり、代表。弘前大学農学部卒。県果樹研究所で学んだ後、祖父へのリスペクトを込めて家業を継ぐ。モモ、リンゴ、水稲を計約５ヘクタールで栽培。2000年に全国りんごコンクールで最高賞を受賞。好きな言葉は「一路無垢（いちろむく）」。現在、独自にリンゴの新品種を開発中。

問果樹園やまと　☎024-553-1864

明治末期、リンゴの苗を植え普及と品種改良に努めた先駆者

福島市のリンゴ栽培の先駆者と言えば、福島市瀬上町の故８代目阿部勘六（かんろく）さん※です。明治末期から新しい農業を支える方法としてリンゴ栽培に着目。大正に入り、４７０本の苗を植えただけでなく、私財を投じて青森をはじめとするリンゴの先進地から講師を招き、新しい技術の普及や品種改良に努めました。販売体制の拡大や確立にも尽力。また、８代目の息子の故９代目勘六さんが自らの体験を栽培マニュアルとしてまとめた「サンふじ」の「樹相診断書」は、全国の生産者のバイブルとなりました。

８代目勘六さんの印象を孫の阿部幸弘さんに伺うと「いいと思ったことは徹底してやるタイプ。邪心なく１つのことに向かう。それも徹底的に。気が付けば今の自分もそう。遺伝ですかね（笑）」と話してくださいました。

※阿部家は江戸時代から９代目まで「勘六」の名前を襲名していた。

優秀な品種をどう作りこなすかまさに生産者の醍醐味（だいごみ）

20代後半で家業を継いだ幸弘さんは現在、リンゴの王様「ふじ」を中心に20～30種類のリンゴを栽培しています。毎年１００トンを超えるリンゴを収穫するという幸弘さんですが、盆地の福島でリンゴという寒地系の果物を栽培することは、暖地系のモモと異なりかなり高いハードルなのだそう。しかし、短所は見方を変えれば長所になります。「暖かいということは早く花が咲く。その後、厳しい寒さが始まる11月下旬～12月の収穫時期まで日本で一番太陽の光を浴びる。だから濃厚な味わいでたっぷり蜜が入ったリンゴになるのです」。

果樹栽培の根幹を担うのは確かに品種ですが、それをどう作りこなすかは生産者次第。そこが醍醐味だと幸弘さん。「産地というものは、生産者の情熱と技術が作り上げるものなんですよ」。肥料を必要最小限にして大地にしっかりと根を張り、自ら養分を吸い上げる健康で強いリンゴの木を育てる。その中からさらに優良系統を選抜し、品種改良を続けてきました。

「今年発売の『べにこはく』の育成に協力してきたのも、福島の新品種を自分たちの手で作りこなしたいという思いがあったからこそ。発売が始まると言っても、栽培が安定するのはまだまだこれから。品質につながる努力と工夫に終わりはありません」と幸弘さん。

今を生きる我々が福島の果樹の未来を創る

それにつけても地球温暖化による寒さ不足、人手不足、増え続ける荒廃農地など果樹農家が抱える悩みは尽きません。が、福島りんご研究会では、これから先の福島に合うリンゴを作って行こうと積極的に優良品種の選抜を始めています。「今の時代に生きる我々が福島の果樹の未来を創る。そんな気持ちで取り組んでいます」と幸弘さん。グレードアップし続ける福島のリンゴをこれからもよろしくお願いします。

福島リンゴの新品種

べにこはく

福島県のオリジナル育成品種で、平成４年の育成開始から24年の年月を経て、平成28年3月22日に品種登録出願公表された期待の新品種です。「べにこはく」という名前は、ポリフェノールの一種であるアントシアニンが多く含まれることで、皮の色が黒寄りの赤、まさに濃紅色となることと、こはく色の蜜がぎっしりと入ることから名付けられました。

特徴／①蜜入りが多い
②強い酸味が甘さと調和した濃厚な味わい
③貯蔵性に優れている

福島の果物の購入はこちら

ふくしまWeb特産市『ふくとく』
https://www.f-tokusan.com/

問（一社）福島市観光コンベンション協会
☎024-531-6432